

# ヨーロッパ文学研究

第 39 号

外から見たフランス詩……………小林 路易	1
真昼の神話について	
——ロマン・クルトワの場合……………瀬戸 直彦	27
『テレーズ・デスケルー』考	
——回想形式と廻行のエピソードをめぐって——……………藤井 史郎	41
ポール・シニャックにとっての伝統と近代	
——『ドラクロワから新印象主義』——……………北村 陽子	56
『ザーイスの弟子たち』における「暗号文字」	
——言語と「黄金時代」——……………岡 誠一	69
カフカ作品における「笑いを誘うもの」について	
——『ある犬の研究』を手がかりに——……………野口 陽子	84
痛みと共感の人間性	
——『局部麻酔をかけられて』の一断面——……………杵 渕 博 樹	96
長篇作家の誕生	
——『虐げられた人々』について……………杉 里 直 人	108
メリニコフとレスコフ……………塚 本 善 也	128
月の犠牲者たち	
——ブルガーコフ『巨匠とマルガリータ』の エピソード——……………宮 澤 淳 一	142
アンナ・アフマートヴァの詩における〈柳〉 について……………梶 重 樹	159
新谷敬三郎先生を送る……………井 桁 貞 義	172

痛みと共感の人間性

——『局部麻酔をかけられて』の一断面——

杵 渕 博 樹

ヨーロッパ文学研究 第39号 別刷

1992

早稲田大学文学部

1992

## 痛みと共感の人間性

——「局部麻酔をかけられて」の一断面——

杵 渕 博 樹

ギュンター・グラスの三番目のロマン『局部麻酔をかけられて』は、1969年に発表された。南ベトナム臨時革命政府が樹立された年だが、まだ戦争は終わっていない。登場人物たちは、1967年のベルリンで、ベトナム戦争を経験する。米軍の行動に批判的な人々の葛藤である。進行中の未解決の問題に関わる政治色の濃い題材は、発表当時、多くの拒絶反応を呼び起こした。生々しい政治性と、グラスの物語の語り手に期待されていたアウトサイダー的パースペクティブの放棄が否定的に評価されたのである<sup>97</sup>。後になって、学者や評論家は、この作品の再評価を行うようになるが、その際強調されるのは、物語技術の面白さと、「個人」を描出する意図の強調である<sup>98</sup>。本論考では、それらの再評価を受けて、諸々の物語技術の効果に注目しつつ、この作品の思想的特質、特に「痛み」を起点とする啓蒙に焦点を当てて考察を進める。

1967年、米軍の展開するベトナムの人々の惨状と、自分たちが、その米軍を資金的・政治的に支えているという事実とによって、あるベルリンの高校生は、痛みを感じた。彼は教師にこうたずねる。

「それはあなたを怒らせるか、少なくとも悲しませませんか？」

「よく悲しくならうとはしてみる。」<sup>99</sup>

語り手である高校教師シュタールッシュ (Starusch) は痛みを感じていない。しかし、感じるべきだと考えている。彼は痛みを知らないわけではないのだ。だから、感じなくても想像できる可能性がある。そして、この「痛み」は一つの政治的物語を通して、独特の概念を獲得する。登場人物たちの抱える、心理的、肉体的、個人的、社会的、倫理的な多様な痛みと、それら相互の葛藤、そして、それらの語られる過程が内包する、それらの痛みに対する、また、タイトルに見られる通りの「麻酔」状態に対する評価などが、情報化社会、大量生産大量消費社会に生きる先進資本主義諸国の都市住民に問われる普遍の人間性の問題を描き出しているのである。作品の中に見られる痛みは、それぞれ一見ばらばらであり、それらの比喩的・象徴的な語られ方によって、相互の重なり合いを予感させられるような場合でも、それぞれの比喩・象徴の構造、属する文脈などが、微妙にずれていたり、明らかな矛盾を形成していたりするのだが、それらの総体は、痛みの感覚を起点とする、一つの総合的概念として解釈できる特定の方向を持つ。

この多様な痛みの総合の方向を決定付けているのが、語り手シュタールッシュの啓蒙への意志である。この物語は、ベトナムの米軍に抗議しないベルリン市民への啓蒙を意図した高校生シェールバウムの愛犬焼き殺しデモを中止させようとする、教師シュタールッシュの奮闘を軸にして展開する。そんなデモは何にもならない、という教師による生徒の啓蒙の過程であり、生徒がデモに託した啓蒙的意図の検証である。また、シュタールッシュは、生徒に対してばかりではなく、ナチに協力した過去に悩む同僚に対しても、その過去の反省を生産的に生かすための啓蒙的姿勢で臨む。しかし、物語の結末は、それらの啓蒙的試みの挫折であり、繰り返す痛みである。

「何も長続きはしない。いつも新しい痛み。」<sup>100</sup>

この一節は、直接はシュタールッシュの歯の痛みの再発を受けているが、作品の最後の二文であるだけに、内容的には物語全体を受けていると考えられる。ここで言われている「痛み」という語は、シュタールッシュの、この物語における思い通りにならない啓蒙の経験をも含む、挫折の記憶を暗示し、また、シェールバウムを苦しめ、シュタールッシュの啓蒙的試みを喚起することになった、ベト

ナム戦争のような社会問題による人類的痛みを暗示している。

ナバームで焼き殺されるベトナムの人々の痛み、その痛みの存在に関する情報を受け取っているにも関わらず、この痛みを想像することのできないベルリン市民に、生徒シュールバウムは、何とかしてこの痛みを感じさせたいのである。彼は、犬の好きな人々に、自分の可愛がっている犬を焼き殺してみせることで、日々人間が焼き殺され、それを間接的にせよ自分たちが支えているのだということを、わからせようとする。

高校教師シュタールツェは、彼の生徒シュールバウムの愛犬焼き殺しデモ計画を中止させるため、様々な手段で再考を促す。その動機は、動物保護精神の旺盛なベルリン市民が、このようなデモに対してヒステリックに暴力的に対応する可能性の懸念、つまり、生徒が怪我をしたり、場合によっては命を落とすかもしれないという心配である。自分自身が生徒を反戦デモに誘うくらいであるから、シュタールツェは生徒の意図自体は支持していると考えられる。

彼は、自分の大戦中の体験（潜水艦の中で焼け死んだ乗組員たちや、空襲を受けたハンブルグの市民たちの惨状）について話して聞かせ、残虐行為の記録を集めたスライドを見せる。これは、多くの悲惨な歴史的事実の、より生々しい情報を与えることで、生徒がショックを受けているベトナムの状況を相対化させる意図によって行われているように見える。相対化による麻酔で、痛みを感じなくさせようというのである。しかし、シュールバウムは、逆に自分の確信を強める。

シュタールツェのもう一つの説得の理屈は、生徒の計画の啓蒙効果に対する疑問である。シュールバウムは、人々は焼身自殺などには慣れてしまっているから、犬を焼く方が衝撃的だろうと主張するが、シュタールツェは、民衆は何か刺激的なものをいつも待ち望んでいるのだから、その場限りのセンセーション以上のものは期待できないだろうと反論する。また、教師は、18世紀末のダンツィヒの少年革命家バルトルディ（Bartholdy）の、多くの労働者を犠牲にした蜂起の失敗を挙げて、状況判断の大切さを説き、冷静になるよう説得する。

また、生徒の計画に対する部分的変更の提案によって、実質的に計画の実行を

延期させるという方法も取られる。計画の実行予定場所に連れて行かせたり、生徒の代わりに自分が実行することを提案したり、他の犬を使って実行することを薦めたり、その提案を受け入れて生徒が別の犬で行う気になると、その方針転換を責めたりするのである。

その他、警察に通報するという脅しもあるが、これは先生がそんなことをするわけがないという生徒の信頼から相手にされず、音楽と文学の才能を生かして芸術で政治参加しろ、という犬焼き殺しに代わる唯一の代替案提示も、シュールバウムには全く受け入れられない。

以上のような説得行動は、17才の反抗という共通性を持つと理解されている。シュタールツェ自身の体験に依拠している。生徒シュールバウムは、作品の設定である1967年現在17才であるが、シュタールツェの方は二次大戦末期に17才時代を過ごしており、この頃、彼は大人の社会への不信から、反社会的・破壊的な少年集団を組織して暴れていた。結局、彼は逮捕されて、懲罰隊に入れられ、援護射撃無しの地雷撤去作業をさせられている。この体験の意味を、教師は生徒に伝えたいのである。社会に対する不満や苛立ちには理解を示しながらも、それらに駆られた無謀な行動、という自分と同じ失敗だけは避けさせたいのだ。しかし、生徒の側は、この重ね合わせを否定する。シュールバウムが行おうとしている計画は、シュタールツェのやっていたようなアナーキーな反抗ではなく、理性的な抗議行動だというのだ。

教師が語る自分の体験は、教師自身にとって二つの側面がある。一つは上述のような挫折としての側面であり、もう一つは、自分のアイデンティティを主張する象徴的な行為としての側面である。彼の17才当時の反社会的行動自体は、彼自身全面的に否定することはできないのだ。「行為 (Tat)」自体は肯定され、その招いた結果だけが明らかに否定的に評価されるという分裂を孕んだままで、シュタールツェは生徒の説得にあたっているのである。彼の生徒に対する啓蒙は、体験の伝達をその中心とする。つまり、自分の個人的体験への説得の論理の限定である。シュタールツェは、イデオロギー一般の持つ暴力性を警戒しており、自分の言動が特定の理論的体系を形成しないよう、個別的な事象への密着を

指向する。これは、すべてのプロセスにおいて語り手が自覚的に行っているわけではないが、結果として彼の一貫した傾向となっており、作家グラスの強い意図が感じられる<sup>9)</sup>。自分の体験の生徒の計画への重ね合わせは、体験伝達への啓蒙的效果の期待だけではなく、生徒の計画への個人的感情移入をも招く。説得の経緯の中で教師が提案する、計画の危険性から生徒を守るための、計画の代行は、実は、自ら行動する、という象徴的なアイデンティティ確認願望の現れなのである。生徒は、その計画の断念に際して、教師の、17才当時の「行為」を吹聴するばかりで、最早自分では凡そ「行為」などは不可能な惨めな「大人」の姿への嫌悪を、その理由として挙げる。この「行為」への不能の自覚は、シュタールツェの最大の痛みなのである。彼は、それを克服するものとして、計画の代行を夢想していたのである。彼が生徒の断念に幻滅するのは、その断念が彼の啓蒙の成果ではなかったことからだけではなく、自分にとって「行為」の機会が失われたことからでもあるのだ。ここでは、無私の精神は幻想であり、生徒を思い遣る教師の啓蒙も、個人的な挫折の痛みが持ち込まれた、極めて個人的な営みなのである。

シュールバウム計画に対して、啓蒙的效果に対する批判的洞察よりも、自分の個人的な思い入れで態度を決定しているのは、語り手シュタールツェだけではない。シュタールツェの同僚であるザイフェルト (Seifert) は、彼女の17才当時のナチに協力した過去を、最早自分たちの世代にはどうにもできない罪と考え、新しい汚れない世代に属するシュールバウムの「行為」によって、それが救済されるかのように考えている。また、シュールバウムのガールフレンドである毛沢東思想の信奉者レーヴァント (Lewand) は、彼女の考える革命の一部として、この犬焼き殺しデモを捉えている。これらの人物の期待は、シュールバウムには不本意なものである。彼は、第一義的には、自分の、飽くまでも個人的な「痛み」の表明であるところの計画の意味を誰も理解してくれないと考え、少しずつ実行への意欲を失っていく。シュタールツェの疑問に対して、自分の計画の啓蒙的效果を主張はするものの、当のシュールバウムにとってさえ、このデモにおいては自分にとっての意味の方が大きいのである。身近な人々の誤解は、彼

を失望させる。デモの際、彼を暴力で傷つけるかもしれない、無理解な警察権力や通行人の存在については、予め覚悟しており、それらを前提にして計画が立てられているにもかかわらずである。しかも、彼はその誤解の原因を決して彼の計画自体にあるとは考えないし、誤解を解く努力もしない。つまり、啓蒙的效果は二次なのである。

このようにして、シュールバウム及び彼の計画の周辺の人々は、啓蒙的行為の意味をその目的から遊離させ、自己目的化した行為への期待に閉じ込められた個人としての特性をあらわにしていき、啓蒙の主体となる者もやはり、個人的利害に縛られた存在でしかない、すなわち、一定の原理に従った、純粋に理性的な啓蒙的機能をアイデンティティとするような存在ではありえない、という現実の困難を強調することになる。どこまでも小市民的利己主義から抜け出すことのできない人間像が、この作品の中では普遍性を与えられているのだ。そういう人間しかない社会を前提にして、啓蒙の可能性が問われているのである。

このような視点の下で捉えられる個人性は、各個人の過去によって規定される。現在の状況を形成するのは、それぞれの過去と、それぞれの仕方で対峙する人物たち相互の関係である。過去に規定された現在とは言っても、取り返しのつかない挫折の体験を持った中年の教師と、17才の高校生たちとは、その意味は大きく異なる。挫折の有無を主要な基準とした年代間の隔絶の問題が、シュタールツェとシュールバウムの間には横たわっている。体験の伝達にこだわるシュタールツェの姿勢は、歴史に対する批判的反省の態度であるとも言える。しかし、シュールバウムは、このことを理解できない。彼は、大人の世代の「行為」への無能力と、立場に縛られた保守性に対して、自分の世代の「行為」への可能性と、立場に縛られない自由を認める。ところが、この認識も、いずれは大人になる自分の将来の姿への絶望に通じている。彼は、革命家になるつもりは無いし、大学へ行って医者になるつもりだ、と言明している。つまり、始めから、「大人」になるつもりなのだ。彼の反抗を支える立場論は、彼自身をも巻き込んでいく。その結果、「痛み」の軽減に対する有効性から、シュールバウムは、自然科学至上主義者である歯科医<sup>10)</sup>に懐柔されていく。歯科医とて、立場に縛られ

た大人ではあるが、彼の技術は、実際に痛みを和らげ、その原因を除去しているのである。暴力革命への期待を捨てきれないにもかかわらず、生徒の行動を断念させようとし、極左を自認する人々を否定するシュタールツシュとは違って、歯科医の立場には、一見、矛盾がない。

個人性、言い換えれば、自分のアイデンティティーの主観的確保を最優先する、教師と生徒に共通の態度は、このようにして、啓蒙的計画を消滅させてしまい、体験の伝達をも阻んでしまう。体験の伝達は、個人的な事実を第三者に伝えることで、より一般的な歴史の中に位置付ける意味を持っているわけであるし、そもそも、アイデンティティー確認の欲求と切り離せない関係にあるわけであるから、困難な作業であることは避けられないと言える。この困難を、より見通しの良い視点から読者に提供しているのが、シュタールツシュの過去の情報である。現実認識において過去を重視するグラスの歴史意識<sup>9)</sup>は、進行中の事象に対する積極的働きかけとしての啓蒙を扱うための必要条件として、語り手シュタールツシュの個人史を、現在の彼の言動に直接反映させているのだ。前述の大戦末期の体験の他、戦後の技師としての成功と、元將軍だった工場主の娘との婚約の破綻、それをきっかけにした歴史教師への転向が、彼の主要な過去である。婚約の破綻は、彼にとって精神的に大きな痛手となっており、教師になったことも、落伍者としての自覚としばしば結びつき、彼を苦しめる。グラスの表現は、これらの過去によって形成されたシュタールツシュの人格を描くというよりは、これらの過去が、直接、現在の彼に影響を及ぼしているという印象を創出している。それを可能にする同時性の表現を支えているのが、歯科医の診察室のテレビ（あるいは待合室の雑誌）と、治療のための麻酔（あるいは鎮静剤）である。歯の痛みを感じなくさせる局部麻酔の効いている間、シュタールツシュは、気晴らしのためという名目で歯科医が用意しているテレビ画面に、自分の想念の映像を映し出す。それらの映像は、彼の想像に従って、現在の彼の関心事であるシュールバウムら生徒たちや、彼の婚約破綻を巡る過去の場面、アクチュアルな事件を想起させる報道番組を模した映像、婚約者が登場する架空のCMなどを映し出すが、特に、過去に関連する映像は、彼の願望に沿って振じ曲げられている。麻酔をか

けられたシュタールツシュは、テレビの画面や、雑誌の紙面に、自分の婚約者殺人願望の様々な虚構を繰り広げる。この虚構癖は、彼の心の痛みに対する麻酔であると考えられる。痛みの原因はそのままに保存されるが、一時的な鎮静効果が得られるのだ。しかも、テレビ的表現は、場面の飛躍や、テレビ画面である故のリアリティーを伴うモンタージュを自然に導入して、現在の現実と幻想、そして過去の事実と歪められた過去とを同時に存在させることを可能にしている。結果として、読者には、作品内部での現実と虚構の判別が困難になるが、その一方でシュタールツシュの心理における主観的な事実は、より確かなリアリティーを獲得する。こうして獲得されたリアリティーは、シュールバウム説得の際のシュタールツシュの態度の裏付となっている。

この作品で問われている啓蒙的行為は、「痛み」をその出発点としている。麻痺した感覚に対して、「痛み」の不在を告発することが、シュールバウムの計画の建前であった。倫理的な動機に従って、「痛み」の放置が非難されているのである。他人の痛みを共感することが、自明の人間性として、正義として、ここでは前提とされていると考えられる。それは、歴史を越えた人間性の予感と言ってもいい。「痛み」は常にあったし、これからもあるであろう。それを遠ざけたいと思うのは人間らしいことだ。しかし、その根源を絶つことと、麻酔によって感じなくなることとの間に区別を置くかどうかは、また別の問題であると言える。歯科医に通うシュタールツシュは、ここでは科学技術の進歩を代表している麻酔技術によって、耐え難い痛みから救われているし、彼の虚構の中では、治療を受けられずに放って置かれた歯の痛みが破滅の要因にされたりしている。だが、一方で、彼は、治療中の歯にはめこまれた合金ブリッジの熱伝導の高さを説明され、熱いもの、冷たいものを避けるよう注意されても、あえて冷たいビールを飲んで激痛を経験せずにはいられない。ベトナムの痛みについても、感じない自分をそのまま肯定できない彼の姿勢は、「痛み」の客観的存在の認識を、人間の義務として主張している。また、この主張は、他方では人間の「痛み」を感じる権利の主張でもある。というのは、マスメディアの報道形式のパロディーや、映像表現による安易なリアリティー創出のからくりを逆手にとった表現などは、シュ

タールッシュの虚構を定着させながら、情報過多・情報操作によってその受容者の感覚を歪めている情報化社会の問題点を暗示していると言えるし、自然科学の進歩を賛美し、完全に非政治的な立場や、凡そ政治的なもの存在しないユートピアを語る歯科医の指示に対するシュタールッシュの反抗は、テクノロジーに支配された社会生活——それぞれの分野の専門家に管理され、自分自身で自分をコントロールできる範囲が狭められた社会生活——に対する諸個人の危機感の表現でもあるからだ。局部麻酔によって失われた「痛み」の感覚を取り戻すことは、その「痛み」による苦しみをもある程度覚悟しながら、自分の状態に対する判断を自分で行いたいという願望に基づいていると言える。

テクノロジーに依存することなしには、どうしても堪え難い痛みがあることも、歯科医に通り、虚構の過去を変奏する語り手の姿ははっきりと示している。だから、「痛み」の感覚の見直しは、テクノロジーの全面的否定にもならないし、現存する社会秩序とそれに伴う諸権力の革命的否定にもならない<sup>9)</sup>。「痛み」を、そのまま感覚的に捉えることはできないのだ。理性的、倫理的な一定の傾向に従った想像力を介在させることによって、「痛み」は感覚されるのである。

「痛み」を核心に据えて歴史と対峙しようとする語り手シュタールッシュの姿勢は、「修正主義者(Revisionist)」を自認する作家グラスの政治姿勢に似通っている<sup>10)</sup>。すべてを一度に根本的に解決するような理論や原則を、シュタールッシュは信じない。レーヴァントや歯科医は、それぞれ、毛派の革命理論と自然科学信仰によって、語り手の立場に対立させられている。シュタールッシュは、レーヴァントや彼女の極左の同志たちを全く相手にしないが、歯科医には、診察室でしばしば屈伏させられるばかりでなく、元工場技師としての自然科学を通じた共感もあって、生徒の計画を巡る困難な状況に際しては、頼りにし、アドヴァイスを仰ぎ、生徒本人を引き合わせさえする。この対比は、この語り手に与えられた思想的位置の一面をよく表していると言えるだろう。

歴史教師シュタールッシュは、歴史は混沌だと言いながら、その混沌に便宜上の秩序を与えて授業を行っている。体系を指向しない歴史把握に基づいた啓蒙である。個々の歴史的事実を伝えることは、同じ誤りを犯さないための手段とし

て、重要な意義を持たされる。一方で、便宜的にせよ秩序が容認されることや、伝達されるべき歴史的事実の選択のプロセスは、体験の伝達という発想同様、個人的制約を強く受ける。ここでは、始めから、偏りのない客観的な正しさなどは想定されていないのである。個々の「痛み」は、それぞれ、その都度感じられ、対応されなければならない。だが、シュタールッシュは、むしろ、様々な痛みの中で混乱してしまう。個人的過去に起因する心理的痛みと倫理的痛み、そして肉体的痛み(歯の痛み)がそれぞれに彼の思考に影響を与え、全体としての明確な方向は定まらない。この苦悶は、個人性を重視して、体系や理論を忌避する啓蒙の宿命なのだ。体系や理論の、そこからみ出すものを暴力的に排除する傾向が、ここでは警戒されており、かわりに、個人の感性が啓蒙を保証する位置に置かれている。言い換えれば、この啓蒙の根拠は、個人的な思い入れ以外のところには無いということだ。個人性に依拠する以上、その一般的正しさは証明され得ない。こうして、彼の啓蒙は、体験の伝達を中心にした構造を運命付けられる。だが、個人性へのこだわりと、抽象化や一般化の拒否は、却って、事象同士の安易な重ね合わせによって、まさに体験を共有していないということによる、コミュニケーションの困難を生じさせる。

このように、この啓蒙は、ユートピアを提示しない。画期的な進歩も約束しない。少なくとも、シュタールッシュは、自分に展望が無いことを知っている。その展望の無さは、予め、この作品の物語技術のレベルでの特徴と対応している。語り手のパースペクティブである。それは、『局部麻酔をかけられて』以前の、『ブリキの太鼓』などダンツィヒを舞台にした散文作品の場合とは異なり、小市民的社会の内部に完全に収まっている。シュタールッシュに与えられているのは、物語を外から眺める年代記風のパースペクティブでも、超自然的能力を備えたアウトサイダー的人物のパースペクティブでもない。彼は、語る対象を、充分な距離を取って眺めているのではない。市民的秩序の枠内で現実と批判的に対峙しようとする語り手自身の実りの無い葛藤を、当事者である故の思い入れを込めて見つめているのである。『局部麻酔をかけられて』は、それ以前の作品と同様、現在を語るために過去をたぐりよせるという構造を持ちながらも、先に述べた同

時性の表現を武器に、その現在に対してどう働きかけるのか、という新しいテーマに踏み込んでいるのである<sup>11)</sup>。

この作品には、末尾に、1969年現在における短い報告が付けられている。デモ騒動の二年後、物語の途中で婚約したシュタールツシュとザイフェルトはまだ婚約中であり、物語の中で何度も言及されるシュタールツシュの歴史論文は、一向に進展していない。そして虫歯、再度の歯科医通いである。生徒のデモ計画を巡る騒動は、教師の新たな挫折となった。元の婚約者への愛着と表裏一体の恨みも消えていないことだろう。語り手の葛藤は終わらないのだ。だが、痛みを感じ続け、その痛みにこだわり続ける姿勢は、絶望的な現実状況の中での一つの希望ではある。見下ろし、見通す視点が無い代わりに、ここには、日常感覚に還元された政治があり、社会があり、歴史がある。しかし、それらは還元されて終わる静的なものではない。個人性と日常感覚を経て、何らかの具体的な反応を生じさせる可能性を孕んでいるのだ。非専門家・素人の理性の復権である。もちろん、それは、専門領域から締め出された素人としての個人においてのみならず、専門家自身（専門家としての個人）の内部でも生じうる変革であると考えられる。国家の主権が国民にあり、その国民が平等な政治的権利を有するという意味での民主主義の原点が顕みられているとも言えるだろう。グラスは、別に新しい理念を提示しているわけではない。民主主義を掲げる国家の現実と、そもそもの民主主義の理念との乖離に注目しているのだ。グラスは、シュタールツシュを、絶望的とも言える「痛み」の繰り返しの中に置きながら、修正主義的傾向の可能性を暗示している。何も解決しない物語であるにも関わらず、『局部麻酔をかけられて』は、ユートピア的な展望への固執を否定しつつ、一つ一つ新しい問題に取り組むしづさを持つと、という積極的な呼び掛けになっているのだ<sup>12)</sup>。

【注と参考文献】

- 1) H. L. Arnold は失敗作であると断定している。Heinz Ludwig Arnold: Zeitroman mit Auslegern—Günter Grass' »örtlich betäubt« (1969) In: Brauchen wir noch Literatur?—Zur literarischen Situation in der Bundesrepublik, Düsseldorf 1972, S. 166.

- 2) H. Brode, R. Gerstenbergなどは、一人称による語り手のパースペクティブを積極的に評価している。  
Hanspeter Brode: Von Danzig zur Bundesrepublik. In: Text und Kritik, Günter Grass, München 1978.  
Renate Gerstenberg: Zur Erzähltechnik von Günter Grass, Heidelberg 1980.
- 3) Günter Grass: örtlich betäubt, Luchterhand, Darmstadt und Neuwied 1985<sup>8</sup>. (Sammlung Luchterhand 195) — Zuerst 1969.  
„Macht Sie das nicht zornig oder wenigstens traurig?“  
„Oft versuche ich, traurig zu sein.“ S. 12.
- 4) „Nichts hält vor. Immer neue Schmerzen.“ Ebd, S. 190.
- 5) G. Cepl-Kaufmann は、『局部麻酔をかけられて』を政治の社会心理学的現象 (sozial-psychologische Phänomene) への還元と評しており、これをグラスの「理論敵対性 (Theoriefeindlichkeit)」、「無理論性 (Theorielosigkeit)」と関連付けている。Gertrude Cepl-Kaufmann: Günter Grass — Eine Analyse des Gesamtwerkes unter dem Aspekt von Literatur und Politik, Kronberg 1975, S. 110.
- 6) 歯科医は名前が示されていない。この匿名性は、彼が、他の人物の顕著な個性に対して、むしろ抽象的な機能を代表する存在に近い役割を負っていることを暗示する。
- 7) 歯科医は、シュタールツシュのテレビ虚構における暴力的破壊的の革命指向を非難するが、彼の反暴力主義は、麻酔をしないで治療するという脅迫で、反抗的な患者を屈伏させており、権力と同化した暴力には全く無批判であることが示唆されている。
- 8) グラスのこの傾向は、R. Gerstenberg も指摘している。(vgl. a. a. O., S. 98)
- 9) 語り手の内部において、暴力革命は虚構に投影される願望としてしか現れない。
- 10) 「私は修正主義者だ。」 „ich bin ein Revisionist.“ )Über das Ja und Nein<, Dez. 1968. In: Günter Grass, Werkausgabe in 10 Bänden, Band IX, Luchterhand 1987, S. 322.
- 11) ドイツ社会民主党 (SPD) の応援を積極的に展開し始めていたグラスの実際の政治活動とも対応していると言える。
- 12) この論考では、グラスにおける「啓蒙」と、歴史的概念としての啓蒙・啓蒙思想との関わり、また、その「啓蒙」を支える倫理とキリスト教の倫理との関わりには触れることができなかったが、それらについては、また、別の機会に論じてみたい。